

埋文にいがた

No. 69
2009. 12. 25

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

平成21年度発掘調査遺跡の紹介

境塚遺跡

(阿賀野市百津字境塚16-1ほか)

JR水原駅の南西1kmにあり、旧阿賀野川右岸に形成された標高1~7.5mの自然堤防上に立地します。国道49号阿賀野バイパス建設に伴い、平成21年4月~11月に調査を行いました。総延長670m幅80mの調査範囲のうち4ブロック延べ18,176㎡を調査したところ、鎌倉~室町時代の大規模な遺跡であることが分かりました。

調査範囲の中央部では、方形に巡ると見られる一辺が50m以上・幅約2mの堀があり、この内側から掘立柱建物25棟や井戸17基などが見つかりました。堀が途切れる部分は土橋と考えられます。掘立柱建物は、廂を持つ梁行1間型が8棟あり、最大のものは長さ10.4mでした。

見つかった井戸には、深さ約5mの大型のものが2基あります。SE1007は上端直径約6mの穴の中央に、一辺約1.2mの正方形の井戸側を検出しました。井戸側は隅柱と栈木で固定した骨組に、長さ195cmの板を3段継ぎ合わせてあります。底には水溜めとして直径68cmの曲物が据えられ、この曲物のまわりには浄水のための丸石が敷き詰められていました。出土品には鎌倉後期の中国製天目茶碗や青磁瓜形合子といった高級品が目を見せます。これらの遺構や陶磁器から、遺跡は有力者が住む居館であった可能性が高いです。

調査範囲の北側では、両脇に幅約1.5m、深さ約1mの溝を持つ幅6mの大きな道が見つかりました。この道は、西側に隣接していた旧百津瀉まで伸びて船着場に接続していた可能性があります。また、道よりも北側には遺構がほとんどないことから、集落の境界も示していると考えられます。

当時この地は「白河荘」と呼ばれた荘園であり、鎌倉期には大見氏が地頭でした。阿賀野川の河川交通の要衝にある境塚遺跡は、大見氏とも関係しながら発展したのでしょう。(荒川隆史)



堀に囲まれた居館・奥は五頭山麓



大型井戸SE1007(直径約6m・深さ約5m)



中世の道(幅6m)

す ざわ かく ち 須沢角地遺跡

(糸魚川市須沢字大坪2673ほか)

糸魚川市南西部の、^{ひめかわ}姫川左岸に形成された^{しぜんていぼうじょう}自然堤防上に立地し、標高は約6mです。今回の調査以前にも、様々な開発に伴って、数回にわたり調査されてきました。今年度は、平成16年度から続く北陸新幹線建設に伴う調査で、^{きょうきやく}橋脚2基分に当たる約240㎡を発掘調査しました。

調査面積は広くはありませんが、遺物包含層は厚く、5層にわたり絶え間なく堆積しており、古代(7世紀末～9世紀)及び中世後期(15世紀)、近世初頭(17世紀)の土器・陶磁器類が大量に出土しました。

特に、古代の遺物が最も多く、遺構も多く発見されています。ここでは、古代の遺構の一部を紹介します。

今回の調査では、^{ほったてばしらたてもの}掘立柱建物4棟、^{たてあなたてもの}竪穴建物3棟を検出しました。写真は、古代の最下層で検出した建物の様子です。

掘立柱建物は、大部分が調査区の外側に延びることから全容は把握できませんでしたが、調査できた部分では^{けたゆき}桁行3間(7.6m)・^{はりゆき}梁行1間(2.8m)以上を測る比較的大きな建物です。

竪穴建物は、深さ約40cmの方形の掘り込みを持つ建物で、大きさは長軸4.0m・短軸3.8mを測ります。壁の内側には幅10cm程の細い溝が巡ります。土層観察によって、溝には板を差し込み、建物の内側から土を突き固めて固定していたことが分かりました。また、溝の四隅には柱穴も見つかりました。さらに、建物の竪穴の外側には、竪穴を抱えるように3本3列計8本の柱穴がほぼ等間隔に配置されていました。このような柱配置は、掘り込み空間を最大限に利用するための工夫と想定され、この建物がどのように使用されたのかを考える上で重要な手掛かりとなりそうです。また、この建物の床を取り除いたところ、一回り狭い床が見つかりました。広い建物と壁の一边を共有していること、^{ゆかめん}床面がほぼ同じ高さであることから、かつては小型の建物であったものが、ある時、生活スペースを拡大する目的で大型に「改築」されたと考えられそうです。この「改築」により、床面積は約2.4倍に広がりました。

今回、検出した遺構と遺物は多岐にわたります。また、須沢角地遺跡は、古代北陸道の^{おうみのえき}滄海駅の有力な候補地の一つともされ、関連性が注目されています。今後は、整理作業を通じて、遺構と遺物の歴史の変遷を明らかにし、この土地の利用の在り方に迫りたいと考えています。

((株)古田組 相羽重徳)



調査区近景



古代の掘立柱建物・竪穴建物



「改築」された竪穴建物



古代の須恵器有台杯

むら まえ ひがし
村前東A遺跡
 (阿賀野市飯森杉字村前190番地)

阿賀野川右岸の沖積地に立地します。国道49号阿賀野バイパス建設に伴い、延べ6,490㎡を調査したところ、3面の遺跡が重なっていることが分かりました。このうち上層と中層は、中世(鎌倉時代後半・13世紀後半～14世紀初頭)の集落です。上層と中層の間には20cmもの土が積もっているにもかかわらず、大きな時期差を見出すことができませんでした。遺跡周辺が洪水で運ばれた土砂で埋まったため集落が作り変えられた可能性が高く、自然科学分析による裏付けを行っているところです。

中世の集落では、掘立柱建物12棟、井戸20基、溝23条などを検出しましたが、集落の中心は飯森杉集落のある調査区の北側へと広がっています。一方、南側で発見した大溝を境に掘立柱建物や井戸の分布がなくなり、調査区が集落の縁辺であることが分かりました。多数発見した遺構は、同時に存在したのではなく、集落が繰り返し作り変えられた結果と考えられます。1時期には、数棟の建物と数基の井戸で構成されていたようです。また、掘立柱建物は、特定の溝と平行するように建てられており、計画的に集落が築かれたものと考えられました。井戸が、特定の範囲からまとまって検出されたことも特徴的でした。新しい井戸を掘りつつ、古い井戸を埋めることを繰り返した結果と考えられます。

このように、今回の調査を通して、中世の集落が繰り返し作り変えられたことが分かりました。また、中世の遺構検出面から50～70cm下には、数少ないながらも古代(下層、平安時代・8世紀後半～9世紀前半)の遺構・遺物を検出しました。そして、下層から上層までの500年間に、厚さ1mにも達する多量の土砂が積もっていることが明らかになりました。現在の阿賀野川は、遺跡から2.5km西側に流れていますが、中世にはより遺跡に近い位置を流れていたことが江戸時代の絵図面から分かっています。洪水被害を受けるリスクがある反面、内水面交通を利用する上では利便性もあることから、同じ場所に繰り返し集落が築かれたものと考えられます。
 (加藤 学)



遺跡の近景



上空から見た中世の集落(写真上が北)



繰り返し掘り直された井戸



集落の境と見られる大溝

平成21年度整理の状況

かわくほ
川久保遺跡

(南魚沼郡湯沢町大字神立字川久保ほか)

新潟県の南西部、群馬県境に近い魚沼地方の山間部に存在します。近くを流れる魚野川の支流戸沢川の左岸段丘上にあり、標高は約355mです。以前から知られていた遺跡で、縄文中期から後期の大型集落であることが分かっています。一般国道17号湯沢交差点改良工事に伴い、平成11・12年に発掘調査を実施しました。現国道の両側、幅約10mの細長い調査区で、調査面積は3,400㎡でした。

発掘調査によって、縄文中期では住居の炉を中心に土坑などを確認しました。炉には長円形に石を組んだもの(石囲炉)、石組みと土器を組み合わせたもの(複式炉)があります。炉のほかに、土器を単独に地中に埋め込んだ埋甕も多く見られました。また、県内では出土例の少ない、床に石を敷いた敷石住居も確認できました。この敷石住居の炉の近くからは、獣骨片がまとまって出土しました。縄文後期では、長さ20～40cmの川原石による径約1mの集石が多く見つかりましたが、性格は不明です。

出土遺物量は調査面積の割に多く、深さ10cmの浅箱コンテナで土器類391箱、石器類123箱にもなります。土器は縄文中期が圧倒的に多く、深鉢、浅鉢があります。多くの土器は煮炊きに使われたため、ススやオコゲが付着しています。越後独特の火焰型土器、王冠型土器や東北地方の影響の見られる大木8a、8b式土器を中心として、中部高地系の土器なども少量あります。このような在り方は、魚野川下流域や信濃川流域に共通します。また、地理的に関東に近いことから、関東地方の影響と見られる土器もあります。後期では、県内独特の刺突文様を持つ三十稲場式土器や関東地方の影響を受けた堀之内式土器などがあります。

石器では打製石斧、磨製石斧、石鏃、石錐、板状石器、三脚石器、石錘、石匙、磨石類、石皿、石核などがあります。特に打製石斧、板状石器が多いことが特徴として挙げられますが、魚沼地方の一般的な在り方といえます。現在、石器の分類、実測を中心に作業を進めていますが、今後、土器の整理にも着手し、来年度まで整理作業を継続する予定です。

(高橋 保)



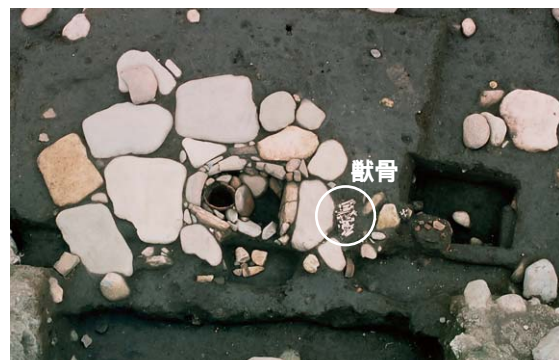
中期の土器



中・後期の石器(磨製石斧・打製石斧・板状石器)



中期後半の複式炉



中期末の敷石住居

新潟県指定文化財

浦廻遺跡出土品(2,160点)

指定年月日 平成16年3月30日

旧白根市の西部、信濃川と中之口川に挟まれた沖積地に立地します。国道8号白根バイパス建設に伴い平成14年に発掘調査を行い、中世の遺構・遺物を検出しました。土坑・耕作溝・足跡群などがありますが、建物や井戸などの生活を示す痕跡は見つかっていません。

出土遺物には土器・木製品が総数1,952点あります。木製品が大半(1,951点)を占めます。

木製品には漆器椀・箸・折敷・下駄・草履芯・檜扇・火鑽臼などのほか、木簡117点があります。木簡は、「南無大日如来」・「南無阿弥陀仏」・「妙法蓮華経」と記された卒塔婆や、「急々如律令」と記された呪符などで、葬送・供養に関連したものが大半を占めます。「南無阿弥陀仏」と記された卒塔婆は、写真のように11本を束にしたものや6本を束にしたものが出土しました。ほかに頭部を墨で黒く塗ったものも見られます。また、木簡の中には元亨2(1320)年と記されたものがあり、遺跡の年代を示しています。

これらの遺物のほか、人骨・獣骨も出土しています。人骨片は60点あり、最小5個体分が確認できます。人骨の検出状況は散在的で、これらの骨には人為的な切り傷や犬の噛み痕と思われる傷を残すものもあります。人骨は埋葬されず、遺棄され、時には犬がかじったと見られ、中世の絵巻物「餓鬼草子」の風景を彷彿させます。

鎌倉時代後期の葬送・供養に係る木簡が大量に出土した例は全国的にも稀であり、中世の葬送の一端を知る上で重要な資料であることから、新潟県指定有形文化財考古資料に指定されました。



調査区近景

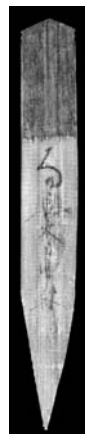


「南無阿弥陀仏」卒塔婆(11本束)



「南無阿弥陀仏」卒塔婆(11本束) S=1/4

赤外写真



頭部を黒く塗った卒塔婆「南無大日如来」 S=1/5



呪符「急々如律令」 S=1/3

説明会・報告会について

説明会

平成21年度は15遺跡の発掘調査を行い、新潟市・南魚沼市・阿賀野市・村上市地域で11遺跡延べ12回の説明会を開催しました。参加者総数は1,369人でした。

検出した遺構を調査員が現地で直接説明し、また出土品の一部を展示して解説し、質問に答えました。会場では担当職員の説明に驚きの声が上がったり、詳細を質問する声が多く聞かれました。

NO.	期 日	遺 跡 名	所 在 地	関 連 事 業	参加人数
1	7/18(土)	小坂居付	新潟市	白根バイパス	115
2	8/22(土)	金屋	南魚沼市	六日町バイパス	186
3	8/22(土)	余川中道	南魚沼市	六日町バイパス	186
4	8/29(土)	下割	上越市	上越三和道路	141
5	8/29(土)	狐宮	上越市	上越三和道路	141
6	9/19(土)	境塚	阿賀野市	阿賀野バイパス	130
7	9/19(土)	村前東A	阿賀野市	阿賀野バイパス	62
8	9/19(土)	柄目木	阿賀野市	阿賀野バイパス	62
9	10/17(土)	余川中道	南魚沼市	六日町バイパス	173
10	10/17(土)	古渡路	村上市	日沿道	6
11	11/7(土)	向大浦	阿賀町	揚川改良	140
12	12/19(土)	六反田南	糸魚川市	北陸新幹線	27
合 計					1,369



村前東A遺跡



余川中道遺跡



境塚遺跡



向大浦遺跡

日沿道報告会

日本海沿岸東北自動車道に係る現地調査が今年度で終了したことから、国土交通省主催で村上市域の遺跡を中心とした報告会を開催しました。

期日は12月3日から5日までの三日間。会場は羽越河川国道工事事務所内の会議室でした。平日にもかかわらず、60人の参加がありました。

NO.	会場	市町村名	期日	入場者数
1	日沿道(村上市域)	村上市	12月3日~5日	60
合計				60



報告会場



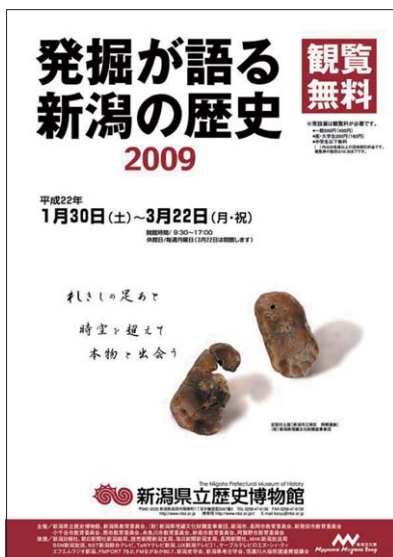
当日資料

平成21年度出土品展について

今年度の出土品展は、新潟県立歴史博物館が企画する「発掘が語る新潟の歴史2009」と合同で行います。

当事業団からの出展遺跡は長割遺跡、西郷遺跡、山口遺跡、下新保高田遺跡、荒町南新田遺跡、六反田南遺跡、山岸遺跡の7遺跡です。ほかに、県内市教育委員会が調査した遺跡の出土品も出展されます。

開催期間は平成22年1月30日から3月22日までの23日間で、2月14日には各遺跡の調査担当者が解説する報告会も行います。ふるってご参加ください。



県内の遺跡・遺物69

たか だ じょう あと
高田城跡(昭和29年県指定)
 (所在地：上越市本城町6番地ほか)

高田平野中央部、関川左岸の自然堤防上に位置します。標高は本丸で15.5mです。
 慶長19年(1614)、徳川家康の六男松平忠輝のために築城された城です。外濠を含めた規模は東西1,200m×南北1,000m。この城の築かれた地域は城下町の中で最も標高が低く、本丸土塁と城下を通る北国街道の標高が同じことが特徴です。

城が完成すると、松平忠輝は関川河口(直江津)にあった福島城からこの地に移りました。その後酒井、松平、稲葉、戸田、榊原と交代改易が行なわれました。いずれも徳川氏三河以来の譜代の重臣を配置したものです。明治初年、榊原政敬を最後として廃城となりました。

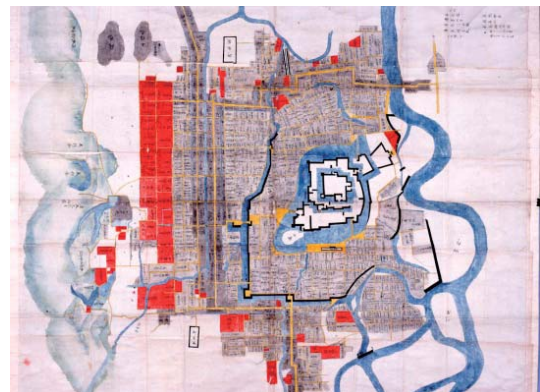
本丸、二の丸、三の丸等のほか、内濠、外濠並びに堂々たる土塁や門跡は旧時の盛観をうかがわせます。大坂冬の陣直前に徳川氏の外画防御の拠点として完成されました。規模は雄大、その縄張りは複雑巧妙を極めた完全な平城で、越後・東北地方には類を見ない城です。かつて日本陸軍が司令部に用い、旧観は大きく損われましたが、城域には、なおほとんどの遺構が残存しています。

これまで本城郭では本丸2地点、二の丸2地点、三の丸1地点の計5地点で発掘調査が実施されています。また、平成5年には上越市発足20周年記念事業として、高田城のシンボリック存在であった隅櫓を復元しました。この櫓は、慶長19(1614)年に創建され、明治3(1870)年に火災のため焼失したものです。復元設計に当たっては、絵図や古文書の検討、発掘調査など、詳細な調査・研究を行いました。規模は、稲葉正通時代の「高田城図間尺」にある数値とほぼ同様で、外観は松平光長時代の「本丸御殿絵図」を参考としました。

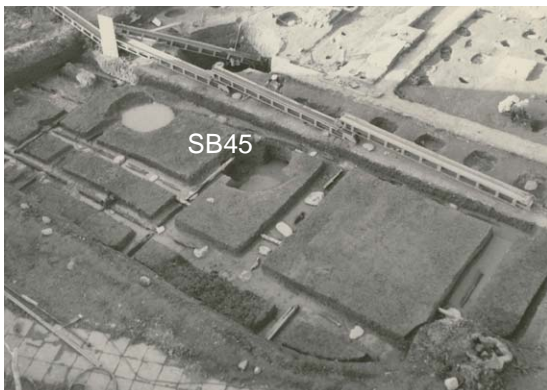
1・2階は高田城などに関連する展示室、3階は展望室になっています。(写真提供：上越市教育委員会)



高田城跡



松平光長時代城下絵図(高田図書館所蔵)



本丸発掘調査

埋文にいがたNo 69

発行 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
 〒956-0845 新潟市秋葉区金津 93番地1
 TEL (0250) 25-3981
 FAX (0250) 25-3986
 e-mail: niigata@maibun.net
 URL: http://www.maibun.net
 印刷 阿部印刷株式会社